北星学園大学文学部北星論集第54巻第２号（通巻第65号）（2017年３月）・抜刷

「文化本質主義」をめぐる一考察

――異文化コミュニケーション研究の視点から――

長谷川　典　子

「文化本質主義」をめぐる一考察
――異文化コミュニケーション研究の視点から――

長谷川 典 子
Noriko HASEGAWA

目次

はじめに
1. 構築主義とは何か
2.「古典的」異文化コミュニケーション研究者たちは本質主義者だったのか
3. 本質主義批判再考
4. 文化研究における「本質主義」
5. 反文化本質主義をめぐる問題
結びにかえて―異文化コミュニケーション研究者の取るべき道は

[Abstract]
The Cultural Essentialism Controversy Reconsidered: From the Perspective of Intercultural Communication Studies

This article is a critical analysis of "cultural essentialism" from a dialectic approach and tries to clarify how the concept should be dealt with by students of intercultural communication. Here the author challenges claims that the "classic studies" such as the ones by E. T. Hall and G. Hofstede are essentialistic. Rather, their approaches are more accurately based on constructionist assumptions. A close analysis reveals that the above problem is a result of the concept of cultural essentialism itself being a "fiction" produced by constructionists (Oda, 1999), and furthermore being mislabeled as the source of prejudice. This article advises that studies focusing on culture and communication be given their due respect regardless of their methodologies.

はじめに

近年,異文化コミュニケーションや文化研究の文脈においては,構築主義的研究の興隆に比例するかのように,文化本質主義的であるという理由から,文化比較研究や,文化研究そのものの意味や妥当性に対して疑義を投げかけた批判的論考が数多くみられるようになっている(馬淵,2010;小柳,2005;丸山,2007;Shaules,2007)。例えば,文化人類学者であるホール(E. T. Hall)は,人々のコミュニケーションの型,時間や空間の使い方のような深層文化の差異を記述する方法を探究するなかで「高コンテキスト」「低コンテキスト」や,「Pタイム」「Mタイム」など文化比較の鍵概念を提示したことで有名であるが,近年ではこのような文化の類型化こそが本質主義的であるとの批判に晒されている。板場(2010b,p.70)による「文化を序列的に分類するために,文化を本質的に固有なものとして予め分類しておいた」との批判などはその一例である。さらに,ホフステッド(G. Hofstede)は,定量的研究を行い,個人主義と集団主義,権力格差,男性らし

キーワード:文化本質主義,構築主義,異文化コミュニケーション研究
Key words: cultural essentialism, constructionism, intercultural communication studies

さ，女性らしさ，不確実性の回避など文化比較の次元を割り出し，国別の文化比較を行ったことで有名であるが，文化の定義が決定論的であり，さらに国別に文化比較を行ったことにより，本質化を促進しているとして批判にさらされている（Starosta，2011，古家，2009）。

しかしながら，このように文化本質主義的であるとして批判の矛先とされているホールのように文化の類型化を試みた研究者たちや，量的研究により文化差の検証を行ったホフステッドのような研究者たちは，果たして本質主義者であり，ゆえに彼らの研究は劣っているといえるのだろうか。また，一般に構築主義研究者が捉えるように，構築主義以前の研究は，本質主義的であると言えるのだろうか。

本稿では，まずこれらの疑問に対する答えを明らかにするために俯瞰的視点に立ち，さまざまな角度から「構築主義」および，「本質主義」について検討を加え，「構築主義，本質主義論争」の実相を探究する。次に，この議論をもとに，本質主義とは構築主義研究者により意図的に対抗概念として作り出された「架空の概念」である（小田，1999）とする立場から，そこには名づけるものと名づけられるものの間の「力」関係が存在していること，さらに本質主義と構築主義を二元論として捉えることに潜む根源的問題を論じる。また，今後異文化コミュニケーション研究に携わる者が「本質主義」や「構築主義」を如何に捉え，文化を論じるべきかについて私見を述べる。

1．構築主義とは何か

本議論を始めるに先立って，広義の構築主義（constructionism）のもととなっている社会的構築主義（social constructionism）とはどのような概念であるのか整理したい。現在では，社会学だけではなく，哲学，文学，人類学，心理学，歴史学など幅広い分野で議論されている構築主義であるが，その系譜をたどると，ヘーゲルやデュルケームらの現象学の系譜を引き継いだバーガーとルックマンに端を発しているといわれている。彼らの主張は，「現実とは社会的にconstructされており，知識社会学は，このconstructionが行われる過程を分析しなければならない」というものであった（上野，2001，p.278）。彼らの主張を受け，その後さまざまな議論が繰り広げられるなかで構築主義を語る研究者たちの主張も多彩になり，Burr（1995　田中訳　1997）によると，構築主義研究者の間でそのスタンスにもはや共通点はなく，ただ家族的類似性があるだけであるという[i]。さらにBurr（1995）は，初学者に向けた社会的構築主義の解説書として著した『An Introduction to Social Constructionism』の中で，構築主義的研究の条件を簡潔にまとめている。それらは，

１）自明の知識への批判的スタンスを持ち合わせている
２）我々が使用するカテゴリーや概念は，歴史的および文化的に特殊なものであることを理解している
３）知識は社会過程および社会的相互作用によって支えられていると考える
４）世界の構築は，ある様式の社会的行為を支持するため，知識と社会的行為とは相伴う過程といえる

という４つの認識であるが，彼女によると，この４つのうち１つ以上を備えるアプローチであれば，大まかに社会的構築主義に分類できるという（pp.2-5）。

次に，これら４つの条件を概観することにより，構築主義研究の輪郭を明らかにしてみたい。まず，１）であるが，これは目に見え

るもの，または観察や実験によって得られた結果であっても「事実」として鵜呑みにするのではなく，批判的に検討を加えるべきであるとする考えであり，伝統的科学主義に裏打ちされた実証主義の考えに真っ向から立ち向かう立場をとっていることを意味しよう。次に，2）についてBurr（1995）は,「女性」「男性」「子供」など人間が生み出したカテゴリーや概念は, 全て歴史や文化の産物であるため,文化や時代が変化すればそれらに対する見方も変化するという，相対的な視点を持ち合わせていることを挙げており，さらには，自分たちの持ち合わせた知識や理解の仕方が他より優れていると考えることを禁じている。3）に関しては，人々の間の相互交流，つまり，コミュニケーションにより知識が生まれるため，人々の社会的交流と言語が研究の焦点となることを指摘している。最後に，4）では，知識や社会は，人間のコミュニケーションによる交渉の結果, 形作られたものであるため,文化や社会のあり方によってさまざまな形をとりうると理解していることを条件として挙げている。

これら4つの条件を検討して明らかになったことは，構築主義的研究の条件の根幹には, 知識や事実とは人間が作り出した「文化」や「社会」そして「コミュニケーション」によって生み出されたものであるという強い認識の存在があるということである。つまり,Burrの解釈によると，構築主義的研究は,コミュニケーションによって影響を受け，生成された結果としての「文化」の存在そのものを否定しているわけではないということがわかる。

また，このBurrによる定義に対して，千田（2001）は,「一般的な意味では，こうした言明が無根拠であるわけではけっしてないが，説明力は弱い（p.3)。」として，構築主義アプローチの新たな指標を提案している。それらは,

1）社会を知識の観点から検討しようという志向性をもつことである。

2）それらの知識は，人々の相互作用によってたえず構築され続けていることについて, 自覚的であることが大切である。

3）知識は（狭義の意味での制度だけではなく），広義の社会制度と結びついていると，認識していなくてはならない。

の３つである。この指標からは，知識や制度というものが人間の相互作用，すなわちコミュニケーションによって支えられているという視点が構築主義研究において重要視されていることがわかる。

次に，俯瞰的に構築主義を眺め，研究法としての現在の位置付けを検討するために，それが生まれた社会学の中では，どのような議論がなされているのかここで整理してみたい。文化研究の文脈では，特に本質主義と対比させることによって，優れた研究法としての位置づけが固まりつつある感さえある構築主義的研究であるが，現在，それが生まれた社会学のなかでは格差社会の急速な拡大のようなマクロな社会変動を前に説明力を行使できずその勢いが失われているという（野口，2008)。また,「社会的に構築されるもの」「クレーム申し立てのあるもの」を研究対象とするという構築主義に対しては,「構築されざるもの」や,「クレーム申し立てのない問題」への対処ができないといった欠点や，存在論的ゲリマンダリング（Ontological gerrymandering）批判など，構築主義的研究の限界が数多く指摘されている（赤川，2001）[ii]。これらの批判に対する反論として野口（2008，p.37）は,「構築主義は，従来の常識的な方法，すなわち『実在の世界をいかに正確に表象するか』というアプローチが間違っているとか，意味がないということを主張しているわけではない。（中略）（構築主義は）言説の世界はどのような現実を構成し

ているのかを問題にし，そのソーシャルなプロセスを対象とする一つのアプローチである。(中略) どちらのアプローチがより適切であるかを決める普遍的基準は存在せず，その都度，目的や価値に照らして判断するほかない」と語っている。つまり，社会学の文脈における構築主義研究者たちは「唯一正しい」研究方法として自らの正当性や存在感を主張しているというよりはむしろ，「何かが社会的に構築されている」という視点で研究することの重要性を訴えているに過ぎないことが窺える。

2.「古典的」異文化コミュニケーション研究者たちは本質主義者だったのか

次に，まず上記のBurr (1995) による定義に照らし合わせながら批判の矛先に立っているE.T. ホールやG. ホフステッドのような「古典的」研究者の視点を考えてみたい。最初に指摘したいことは，比較文化研究者や異文化コミュニケーション研究者は大前提としてさまざまな事象や知識は「文化的に特殊である」と考えるという点であろう。つまり，構築主義的研究の条件「2) 我々が使用するカテゴリーや概念は，歴史的および文化的に特殊なものであることを理解している」に当てはまっており，Burr (1995) の主張に基づくとホールやホフステッドばかりでなく「文化」的事象に焦点を当てる異文化コミュニケーション研究者による研究は広義の「構築主義的研究」と呼ぶこともできる点であろう。

また，多くのコミュニケーション研究者にとっては，人は他者とのコミュニケーションによって影響を与え合い，その結果，常に変化しているという仮定は基本原則の一つであり[iii]，その考えは，条件「3) 知識は社会過程および社会的相互作用によって支えられていると考える」に合致するといえよう。

さらに，千田 (2001) による指標の 2) 知識は，人々の相互作用によってたえず構築され続けていることについて，自覚的であるという指摘を考慮しても，文化とコミュニケーションに焦点をあてた異文化コミュニケーション研究の文脈で行われた文化研究は，少なからず構築主義的な視点を持っていると判断できよう。

これらのことから考慮すると，一般に，コミュニケーション及び異文化コミュニケーション研究者たちは構築主義的研究の基本的前提を多かれ少なかれ共有しているといえ，文化の類型化を試みた，または，量的研究法を用い，「文化を独立変数とした研究計画を立てた」といった理由のみで即本質主義者であると断定するのはいささか早急であるといえよう。

3. 本質主義批判再考

前節においては，構築主義を俯瞰的に捉え，「古典的」異文化コミュニケーション研究についての批判の是非を検討した。当節においては，本質主義 (Essentialism) の意味について，考えてみたい。本質主義とは，「あるカテゴリーには本質が存在するという認識論的信念 (Kashima et al., 2010, p.306)」であり，事物の変化しない核心部分である「本質」の存在を認める立場をさすとされているが，実際は，全ての事物には本質が存在しているとする強固なものから，本質が存在しているものと，していないものどちらも存在するとする柔軟な本質主義など，同じ本質主義といっても，さまざまな違いがある (Sayer, 1997)。

構築主義との対比においては，一種の中傷語の様相さえ呈している本質主義であるが (Berg-Sorensen, Holtug, & Lippert-Rasmussen, 2010)，実際，事物の本質の存

在を仮定し，それを探究することは，意味のない行動といえるのだろうか。筆者はこの問いに対しての答えは否であると考えている。なぜなら，例えば心理学的に言えば，人間はより深層部に存在している本質を探し，似ているものを結びつけることによって現実を理解しているため，この本質主義的な考え方はまさに人間の情報処理のプロセスの一部であるからである（Phillips, 2010）。つまり，本質を探究することを否定することは，すなわち自らに備わった知覚・認識プロセスそのものを否定することになるといえる。さらに，理論的な分析には外延的なものと中心的な本質部分とを区別する抽象化のプロセスが必要であるため，人間の思考プロセスと本質主義的発想は切っても切れない関係にあるともいえよう（Sayer, 1997）。

このように，人間の思考のまさに中核とも言える本質主義的傾向であるが，確かに大きな問題を孕んでいるともいえる。それは，同じグループ内に区分された人が全て同種の特徴を持つと考える本質化（essentialization）の傾向や，それらの特徴がまるで自然に備わったかのように理解してしまうなどの問題が内在すると解釈されていることにある。つまり，本質主義の理解をめぐっては，まずこのような，問題点のみが強調されることが「本質主義＝悪」という短絡的な考えを生む基になっているとも考えられる。しかし，元々の定義に照らし合わせると，このような傾向を本質主義とする見方が必ずしも含まれているとはいえず，この誤解が本質主義批判を大きくしている要因の一つともいえよう。

さらに，全く何の本質的定義もしない言説を語ろうとすること自体が不可能であるため（福田，2006），本質主義的言説を一切否定してしまうことは，多くの研究者にとって大きな足かせとなるばかりか，自らの研究そのものを袋小路に追いやる自殺行為ともいえよう。また，一般的に社会科学研究においては意味やディスコースの解釈とともに定量的な原因説明のための研究も必要である。その意味でも本質を追求する研究を否定する考えは生産的でないといえよう[iv]。

４．文化研究における「本質主義」

上記で明らかにしたように，本質主義的な捉え方そのものは，人間の思考の一部であり，研究上も必要なものともいえるが，文化研究の文脈ではさらに激しい批判に晒されている。それは，元々文化本質主義と構築主義の対立は，非本質主義としての構築主義を標榜するポストモダン人類学／ポストコロニアル人類学が，従来の人類学を本質主義に立つものと批判することによって始まったものであり，構築主義のパラダイムにおいて規定された対立であることに端を発しているといえる（小田, 1999）。つまり，文化研究における「本質主義」は，構築主義の仮想敵として捉えられており，構築主義は本質主義批判によってのみ了解されるものとなってきたという背景が，現在の本質主義的文化研究批判に強く影響を与えているといえよう（椋尾，2004）。

このような背景のためか，例えば文化本質主義を「各々の文化は，その文化を表す純正な要素をもっており，他の文化との間には何らかの明確な境界を持っていると捉える静態的な文化観を意味する（馬渕，2010，p.174）」とするような捉え方や，エスニックアイデンティティを「生得的で原初的なものとして解釈」するものであり，この「絶対的で変わることの無い本質によってエスニックグループの構成員は外部者から永遠に区別される（載，1999，p.74）」といった理解が一般的になっており，このような理解に基づいた「文化本質主義的研究」に対する批判が声高くなされている。

もちろん，文化本質主義をこのように定義し，理解すると，「本質主義」批判は，極め

て妥当かつ当然なものと捉えられよう。しかし，このような「本質主義」的発想で執り行われた文化研究は，批判が必要なほど数多く存在しているのだろうか。筆者は，その疑問に対する答えは否であると考えている。なぜなら，たとえ研究者といえども，生活者として現実的に社会に暮らすなかで，そこに存在する人々の価値観や考え方などが，他国との関係や自然災害，経済状況，テレビや新聞・雑誌などの報道により大きく影響を受け，実際に変化しているのを目にしているはずである。目の前で日々生起している変化に目をそむけ，「純正かつ，変化することの無いまるで鉱物のように静態的な」日本文化の存在を仮定する程，無神経かつ，鑑識眼のない文化研究者など果たして存在しているのかと考えてみれば，その答えが否であることは自明のことといえるのではないだろうか。人間は他者とのコミュニケーションを通して文化を作り出し，他者とのコミュニケーションによって自身も強く影響を受け常に変化し続ける存在であり，その人間が作り出す文化もしかりである。つまり，人間研究，文化研究において現時点での「ある真実」はあり得たとしても，「不変かつ唯一の真実」など存在しえないという考えは多くの文化研究者にとっては至極当たり前の常識として共有されているはずであろう。

さらに，ここで指摘したいことは，「文化には変化しない核心的な本質がある（Sayer, 1997)」という語りには，論理的欠落が存在しているばかりか，認識論的な問題も孕んでいることである。なぜなら，まず上で述べたように「文化」とは，人々のコミュニケーションによって作り出された「構築物」であるという事実を否定する文化研究者は存在しないだろう。しかし，その「文化」＝人々による構築物であることを認める立場と，ある事物が自立的，客体的な変化しない核心部分である「本質」を有し，その部分はその本質によって支配されているとする決定論的な発想は，論理的に相容れず，また認識論的にも折り合うことがない相互排他的な視点であると言えるからだ。たとえば，文化とは，鉱物のように最初からある場所に存在していたり，人とのかかわりも無く突然表れたものであるという立場をとるのであれば，確かに本質主義と和合するだろうが，文化が人々による構築物であるということを起点にすれば，一度生成された文化が，永遠に変化しない核心を維持したまま静的にある場所に存在し続けるという論理には結実しないはずである。なぜなら，人間が作り出した概念をはじめ世の中に存在するもののなかに，不変であるものなど無いともいえるからだ。それは，例えば人間をはじめ生命あるものはみな老化もすれば進化もし，たとえ単細胞動物の細胞のように本質があるといえそうなものでも，不変であるとはいえないことからも明らかである（Sayer, 1997）。つまり，「文化」と基本的に，「変化しない本質」という概念は相容れないものであるといえよう[v]。よって文化とは，人々によって「構築」されているものであるということを認めていながら，その文化を本質主義的に見るということは，研究上での認識論の枠組みを無視していることになる。

これらの議論を通して浮かび上がってくるのは，小田（1999）が主張するように，構築主義，本質主義論争とは，もともと構築主義のパラダイムにおいて規定された対立である上に，「文化本質主義」とは，構築主義研究者によって作り出された架空の概念であるという事実である。このことは，本質主義を自ら謳う文化研究者など実際は一人も存在せず，本質主義ということばが使われるのは主として，解釈主義的または論理実証主義的研究に対する批判という文脈であることからも理解できよう。このように見てくると，構築主義以前の研究を「文化本質主義」とするような批判的考察は，根拠を欠く，的外れの中

傷になりうる危険性さえ孕んでいるということになる。

5．反文化本質主義をめぐる問題

ここまで，文化本質主義批判の生起した文脈を整理し，その問題点を指摘してきた。本稿を締めくくるに当たって，最後に，文化研究において本質主義的な発想や研究そのものを批判し，拒否してしまうことから派生する問題点を取り上げたい。

前述したように，人種やジェンダーをめぐっては差別や偏見を維持させる原因となっているという考えをもとにして，自然で，本質的な共通点を仮定する本質主義的思考が問題であることについては研究者間で合意をみているものの，実際，研究にあたって本質主義とどのように向かいあうのかについての確認はできていないのが現状であるという（Wagenen, 2007）。というのも，人種に関する研究において本質主義を完全に否定してしまうと人種研究そのものに支障をきたすことになってしまうという問題がある。例えばWagenen（2007）によると，１）分析において人種を変数として使用できなくなること，２）人種的アイデンティティや人種的主観などの概念を使用することができなくなることの２つの問題が付随するという。

１）に関しては，人種は作られた概念であるとされるため，必然的に構築主義的研究においては，人種が如何に構築されているかが研究の対象にならざるを得ず，人種や人種的分類を研究の当初の指標として使用するわけにはいかなくなる。また，２）に関して指摘されることとしては，社会的マイノリティーや女性など社会の中で抑圧されているグループの人々にとっては人種や女性といった社会的カテゴリーは自身のアイデンティティの中で極めて重要な位置を占めており，その上，社会の中であてがわれたカテゴリーによって実際に影響を受けているという事実がある。つまり，いくらカテゴリーが社会的に作られたもので本質が存在するわけではないとしても，影響力という観点では個人の中に確かに「存在」していることになろう。にもかかわらず，そのカテゴリーが本質主義的であるからといってその存在そのものを否定してしまっては，その問題について語ることすらできなくなってしまう。さらに，社会に問題の存在を知らしめ，その問題を克服することを目指すような研究においては，中心課題の達成に大きな足かせとなってしまうという問題が残る。実際，このような問題を前にして，社会問題を解決するためであれば，一時的に戦略的に本質的なアイデンティティの存在を認めていこうとする「戦略的本質主義」の必要性を主張している学者も多い（Prasad, 2008）。

これらの議論を鑑みると，社会や文化，人間が作り出した概念に対する研究において，本質の把握または，探究の試みを完全に否定してしまうことは，研究対象の理解に近づくどころか，研究の進展を阻害してしまうことになりかねないことがわかる。

結びにかえて―異文化コミュニケーション研究者の取るべき道は

現在，構築主義はそれが生まれた社会学のなかではその勢いが失われているが（野口，2008），文化研究の中では文化本質主義という「仮想敵」の問題を洗い出すことによってその勢いを増している感がある。しかしながら，これまで検討してきたように，問題は，本質主義そのものに存在しているというよりは，むしろ，本質主義にさまざまな「色付け」をした上で，構築主義と本質主義を二元論のように捉え，構築主義に立脚しない研究は全て本質主義的な「劣った」研究として断罪するような姿勢ではなかろうか。皮肉なことに，

他の研究者を本質主義者と名づけ，批判するという行為の結果，構築主義研究者は力を得，一方，彼らによって「本質主義者」と名づけられた者は，一方的に劣等扱いされ，力を奪われている（Berg-Sorensen, Holtug, & Lippert-Rasmussen, 2010）。果たして，このような行為は彼らが忌み嫌っているはずの「権力の行使」になっていないと言い切れるのだろうか。

ここで，異文化コミュニケーション研究者に求められていることは，まず，構築主義を標榜していない研究であっても，文化的事象を扱っている限り，広義の構築主義研究といえることを念頭に置き，批判する対象があるとすればそれは，人種に基づくステレオタイプや偏見の根拠として「決して変質することのない，各人種に備わった本質」を主張するような態度そのものであり，決して文化の本質を捉えようとする研究や，その研究から導き出された結果ではないということを確認しておくことではないだろうか。

Fuss（1989）も主張するように，本質主義と構築主義を二元論で捉えることは，人間の創造性を阻むものであり，人間や文化への理解の妨げになり得る。特に,「異文化コミュニケーション」の研究者は，文化的背景の相違を基にして起こる問題に対する課題解決志向性をその存在基盤としている（石井・久米, 2013）ことから考慮しても，どちらの研究がより現実説明能力が優れているのかといった優越論に陥ることは避けるべきであろう。さらに，批判的異文化コミュニケーション研究の目的は，社会的弱者が被る不正を明らかにし，その解決に向けて何らかの指針を示すことであり（Martin & Nakayama, 2010, 花木，2011)，他者の研究を否定することではないはずである。つまり，批判的考察の矛先は社会の矛盾や問題点であるべきであり，研究者同士が反目しあい，お互いの研究や研究法のあら捜しをするような状況に陥ることは，学問の進展に寄与しないばかりか，よりよい文化間の関係構築に向けて何らかの指針を提示するといった異文化コミュニケーション研究の存在意義そのものを脅かす行為でしかないことは明らかであろう。

インターネットや交通網の発達により人ばかりでなく，さまざまな概念も絶えず入り混じり動的に変化し，「文化」も複雑な様相を呈している近年，その研究も益々困難になることが明らかである。このような状況の中，質問紙調査によりある時点での集団内の様子を集約して掴み取るといった「本質」の探究を試みる研究や，その成員間での文化や概念の生成や維持方法の解明を目指す研究も，双方が必要な研究といえよう。どのような研究であれ，その研究方法が持つ存在論，認識論の枠にしばられ，複雑な現実の一面を切り取ることしかできないことをふまえると，一つの研究視座のみが正しいとする考えに固執することが知の発展への妨げとなることは明らかである。今後，異文化コミュニケーション研究者に必要なことは，Martin & Nakayama（2010）も主張しているように，従来の知の枠組みを乗り越え，異なるアプローチを同時に可能性として受け入れるような柔軟かつ大胆な姿勢ではないだろうか。

注

i　千田（2001）によると構築主義研究は，１）社会問題をめぐる系譜，２）物語叙述をめぐる系譜，３）身体をめぐる系譜の３つに分けることができるという。１）社会問題をめぐる構築主義の系譜においては，客観主義批判，言語生産者としての専門家の批判的検討，社会問題の実在論／唯名論の対立の３点が焦点となっている。また，２）物語叙述をめぐる系譜においては，過去として語られるべきものをどう叙述するのかという歴史の叙述に関する議論が中心となっている。日本においては，上野千鶴子による「従軍慰安婦問題をめぐる論争」が特に有名である。３）身体をめ

ぐる構築主義は，フーコーによるセクシュアリティの系譜学をもとに，バトラーが発展させたとされている。この系譜の中では，身体やセクシュアリティがいかに社会的に作られた概念であるかについての議論が中心となっている。

ⅱ　クレーム申し立てについては，例えば，水俣病のように実際に生起した問題でも当事者からクレーム申し立てが無いと取り扱えないのかといった議論がある。また，存在論的ゲリマンダリングの批判とは，研究者がある状態や行動を同定している，研究者が状態や行動についてなされたさまざまな定義やクレームを同定しているなど，社会の状態や行動についての判断を停止するといいながら，実際は恣意的に「状態」についての判断を忍び込ませているという問題についての批判である（赤川，2001）。

ⅲ　コミュニケーションの基本原則については，Woods（2008），石井（1993）などのコミュニケーション論テキストを参照のこと。

ⅳ　例えば，社会科学の定量的研究において，文化を擬似的な独立変数と規定して実験的研究を行う場合，本質を仮定しているという批判がある。

ⅴ　実際，本質主義の本質を「場所，歴史，文化などの文脈にかかわらず，普遍的に適用できるもの」として捉えた定義も存在する（Stanisevski, 2010）。この定義によって解釈すると，文化と本質主義は相容れないことになる。

引用文献

赤川学（2001）．「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房　63-83.

Berg-Sorensen, A., Holtug, N. & Lippert-Rasmussen, K.（2010）. Essentialism vs. constructivism：Introduction. Scandinavian Journal of Social Theory, 20, 39-45.

Burr, V.（1995）. An Introduction to Social Constructionism. Routledge, 1995.

Eide, E.（2010）. Strategic essentialism and ethnification-Hand in glove? Nordicom Review, 31（2），63-78.

福田泰子（2006）．「身体に関する現代的な言説のカルチュラル・スタディーズ的研究」『千葉商大紀要』44（1）1-31.

古家聡（2009）．「日本的コミュニケーションスタイルの特性分析―個人主義と集団主義に関する批判的考察から」立教大学異文化コミュニケーション研究科博士学位論文

Fuss, D.（1989）. Essentially speaking. New York：Routledge.

花木　亨（2011）．「批判的異文化コミュニケーション研究についての予備的考察―プラグマティズムの視点から」『多文化関係学』8, 55-64.

石井敏（1993）．「コミュニケーション研究の意義と理論的背景」日本コミュニケーション学会編『コミュニケーション論入門』桐原書店　3-24.

石井敏・久米昭元（2013）「第10章　異文化コミュニケーションの研究」『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣　235-255.

板場良久（2010a）．「異文化コミュニケーション能力」『よくわかる異文化コミュニケーション』池田理知子編著　ミネルヴァ書房　33.

板場良久（2010b）．「沈黙の意味」『よくわかる異文化コミュニケーション』池田理知子編著　ミネルヴァ書房　70.

Kashima, Y., Kashima, E., Bain, P., Lyons, A., Tindale, R.S., Robins, G., Vears, C., and Whelap, J.（2010）. Communication and essentialism：Grounding the shared reality of a social category. Social Cognition, 28（3）306-328.

小柳志津（2005）．「アジア系留学生にみる境界意識―文化規範が本質的に捉えられるのはなぜか―」『異文化間教育』22，80-94.

馬渕仁（2010）．『クリティーク多文化，異文化―文化の捉え方を超克する』東信堂

Martin, J. N. & Nakayama, T.K.（2010）. Intercultural communication in contexts, 5th ed., McGraw Hill.

丸山真純（2007）．「『文化』『コミュニケーション』『異文化コミュニケーション』の語られ方」伊佐雅子編『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社　188-208.

野口祐次（2008）．「社会構成主義の現在―物語の可変性と多様性をめぐって」『三田社会学』13, 35-46.

椋尾麻子（2004）．「『反本質主義』という語り方―その特徴，限界，可能性」『哲学』第112集

小田亮（1999）．「文化の本質主義と構築主義を超えて」『日本常民文化紀要』20, 111-173.

Phillips, A.（2010）. What's wrong with essentialism? Scandinavian Journal of Social

Theory, 11 (1) 47-60.
Prasad, A. (2008). Beyond anaylytical categories of difference : Or, the case for 'strategic essentialism' Academy of Management Annual Meeting Proceedings. 1-6.
Sayer, A. (1997). Essentialism, social constructionism, and beyond. The Editorial Board of the Sociological Review, 453-487.
千田有紀 (2001).「構築主義の系譜」学 上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房 1-41.
Shaules, J. (2007). The Debate about cultural difference : Deep culture, cultural identity, and culture's influence on behavior. Journal of Intercultural Communication, 10, 115-132.
Stanisevski, D. (2010). Anti-essentialism in multicultural societies : Facilitating multicultural discourse through tolerance of cultural pluralism. International Journal of Organization Theory and Behavior, 13 (1), 60-86.
Starosta, W. (2011). Sojourning through intercultural communication : A retrospective. China Media Research, 7 (2), 1-5.
戴エイカ (1999).『多文化主義とディアスポラ』明石書店
上野千鶴子 (2001).「構築主義とは何か―あとがきに代えて」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房 275-305.
Wagenen, A. V. (2007). The promise and impossibility of representing anti-essentialism : Reading Bulworth through critical race theory. Race, Gender & Class, 14, 1-2, 157-177.
Woods, J. (2008). Communication in our lives. Wadsworth Publishing.